研究発表
Research announcement

都市芸術活動を通じた地域の活性化

李明姫
東西大学校教授

1. はじめに

1960年代までの文化は、支配力による少数のためのものであり、60年代以降の芸術派、次第に産業と生活の領域にまで拡散した。1990年代からは、都市開発に文化が借用されるなど、本格的な都市計画ならびに都市開発に文化が用いられた。2000年代に至っては、文化の創造性と多様性が重要な問題として登場し、経済産業と共に人間の暮らしの質と快適さを高めることのできる、都市生存の核心要素となった。人間が精神的に満足感を抱き、ゆとりのある暮らしを送るために、または地域のアイデンティティー確立のために重要視されているアジェンダである。

こうした文化芸術に対する重要性を認識し、芸術を融合した文化空間づくりに様々なアクセスが試みられている。最近、釜山広域市において行われた芸術活動を事例に挙げ、地域活性化を目指した文化芸術活動の方向性について論じることを試みるものである。

2. 2009マウル(=まち)美術プロジェクトの事例

(1) プロジェクトの概要

文化体育観光部が主催し、2009マウル(=まち)美術プロジェクト推進委員会ならびに社団法人韓国美術協会主管の下で、「私たちのまちにおける美術空間づくり」、「路傍の美術路造成」の二つ部門で、<2009マウル美術プロジェクト>公募事業が進められた。ここに、釜山広域市沙下区甘川2洞山腹道路を対象地とする、<夢を描く釜山のマチュピチュ(Machu Picchu): 芸術団体アートファクトリーイン多大浦提案>が、路傍の美術路造成部門に当選を果たし、プロジェクトが始まった。事業期間は2009年6月8日より9月30日まで、甘川2洞山腹道路を中心に10の作品が設置された。

(2) 事業の目的及び企画意図

釜山広域市沙下区甘川2洞は、朝鮮戦争当時、八道より集まった避難民らによってつらく厳しい暮らしの場として始まり、現在に至るまで瘠薄な民族近現代史の爪跡と記録をそのままにしている。釜山の代表的な文化疎外地域である沙下区甘川2洞の山腹道路を中心に、造形芸術品設置による文化空間を造成することで、「暮らしたい空間」、「歩きたい通り」に作り上げ、該当地域の住民と市民に新たな暮らしと日常の体験を提供することを試みた。

釜山の山腹道路は、朝鮮戦争という歴史的な契機と共に、地域の典型的な特性により造成されたものであり、文化的保存価値が非常に高いといえよう。

甘川2洞の山腹道路文化空間づくり事業は、今後他地域の山腹道路の文化空間づくりの始発点となりうるという点において意味が大きい。

1950年代甘川2洞

(3) 対象地及び要求分析

① 場所及び空間分析

釜山広域市沙下区甘川2洞一帯は、天馬山と玉女峰の間に位置する太極をかたちどった谷間の傾斜の急な山腹に、階段状に形成された避難民村として始まった。経済的に豊かではなくとも、互いに思いやりながら暮らす民族文化の原形と伝統を保存しているまちであり、朝鮮戦争が残した近代史の暮らしの跡をそのまま保ちつつ、傾斜地を利用した南向きの集団住居形態は、釜山湾の独特な場所性を呈している。

また、甘川2洞山腹道路は甘川港と遠都市圏をつなぐ捷路であり、狭小な歩道と2車線の山腹道路に過ぎないとはいえ、坎井小学校に通う児童らの登下校道を含めて通行人口が多く、重要な交通機能を持つ場所である。

② 使用者現況及び要求分析

一時は25,000~30,000人あまりに達した人口が、現在は11,000人ほどに減少し、空き家が300軒を超えるほどまちの空洞化が進んでいる。高齢化と共に多数の住民が基礎生活受給対象者である都市貧民村であ